

# 令和2年度特別の教育課程の実施状況自己評価表（西大和学園中学校高等学校）

目指す学校像	磨かれた「知」を備え、豊かな人間性を持ち、世界を舞台に活躍する次世代を担うリーダーを育成する。
重点目標	1.英語を含む外国語の4技能（聞く・読む・話す・書く）を習得。
	2.中学3年次（アメリカグローバル研修プログラム）、高校1年次（海外探究プログラム）等の実践の場で4技能を使用するために必要な5つの力（主体性・協同性・思考力・判断力・表現力）を習得。
	3.グローバルな視野を広げ、世界で起きていることを自身に置き換え行動することのできる3つの力（多様性・課題発見力・課題解決力）の習得。

達成度	A	ほぼ達成（80%）
	B	概ね達成（60%以上）
	C	変化の兆し（40%以上）
	D	不十分（40%未満）

学校評価			
年度目標		年度評価	
No	課題項目	具体的な方策	課題項目の達成状況 自己評価 次年度への課題
1	4技能の習得	英語の授業 中学1年次から授業時間を週5時間確保し、中学英文法の指導を中心に行っている。又、音声活動も重視しており、洋楽を取り入れ、発音・リスニングの指導に力を入れている。中学2年次には、早期よりライティングの活動を取り入れ、既習文法をベースに自らの意見を述べる機会を積極的に設ける。また、中学2・3年次には週1時間、多読の時間を設け、辞書を用いずにアメリカの小学生向けに書かれた洋書講読を行うことで、速読力・類推力を養う。加えて、講読中に気になった表現や印象に残ったフレーズから、検定教科書や入試問題演習では養われない実用英語に触れる機会を増やす。	肯定的な意見が中学2年生では約75%、中学1・3年生では85%以上であった。高校編入1年生で肯定的な意見が例年に比べて少ない理由としては、コロナウイルスの蔓延に伴い、年度当初の6月までオンライン授業の形式をとり、身体を動かすことや実技演習といったことが十分に行えなかったことで、生徒が4技能の習得を実感できる機会が少なかったためであると考えられる。
		国際理解 中学1年次は週2時間、中学2・3年次には週1時間、クラスサイズを半分にしてネイティブスピーカーにより、リスニングやスピーキングだけでなく、グループワークやディスカッション、速読などの活動を総合的に行う。	
		イマージョン 中学3力年と高校編入1年次に体育、音楽の実技教科オールイングリッシュで実施し、実際に体を動かしたり、実技演習を進めていくなかで自然と語彙・表現を理解し、その習得を目指す。	
2	主体性	英語の授業 自主課題や任意参加の講座を数多く設けることで、自らのニーズに合わせて英語力を総合的に伸ばしていく契機を用意する。	肯定的な意見が中学2年生では約70%、中学1・3年生では80%以上であった。行動しなければならぬ環境が用意されれば動くことができるが、自ら考え行動する姿勢がまだまだ低いと考える。
		国際理解 必ず毎月1～2回、自分の意見をクラス全体で語る場を作り、全体の前で発表する機会を設ける。	
		オンライン英会話 中学2・3年次に週1時間、オンライン上でネイティブスピーカーとの1：1のやりとりを実施し、自ら進んで会話をつなぐことでリスニング、スピーキングの能力伸長を目指す。	
	協同性	国際理解 グループワークを頻繁に行い、毎回指導に携わる構成員を変えていくことで、様々な生徒と1つの課題に取り組み、支え合う機会を設ける。	全学年で約80%が肯定的な意見で、グループ内での自身の役割などを大多数の生徒が見つけられていると考える。
		イマージョン 体育における運動や、音楽における実習のなかで、課題に対し協同して取り組む機会を設ける。	
	思考力	英語の授業 検定教科書や英字新聞の読解、英語プレゼンテーション動画を視聴し、国内にとどまらず、国際的な諸問題について英語で情報を収集し理解を目指す。	肯定的な意見が高校編入1年生では65.7%であったが、中学2年生では74%以上で、特に中学1年生や中学3年生では85%以上であった。個人やグループで考えをまとめる作業に対し、その達成を生徒が高く実感することができたと考えられる。
		国際理解 グループでのディスカッションを通じて、他者の意見に耳を傾け自身の意見との共通点や差異に注目し、多面的な思考力を養う訓練を行い、グループの意見をまとめ発表する場を設ける。	
	判断力	英語の授業 年度途中から1学年上の題材を扱い、より抽象度の高いトピックに関する知見を学ぶことで、より批判的に物事をとらえる力を醸成する。	肯定的な意見が中学生では約70%～85%であったが、高校編入1年生では55%と例年に比べて低い値であった。難易度の高い内容や課題を扱っている上、編入初学期にオンラインでの授業を行うことで、その理解度の確認や個々の生徒対応に差が生じたと考えられる。
		国際理解 様々なリスニング、リーディング教材を通じて、判断が一筋縄ではいかない内容について多様な価値観を理解する。又、教員と生徒との間での話し合いを通して、価値観を共有する。	
		イマージョン 授業でネイティブスピーカーにより提示される課題について、自分の考えをまとめ、一つの意見を提示するトレーニングを行う。	
	表現力	英語の授業 中学3年次のアメリカグローバル研修プログラムに向けて、アメリカ合衆国についてまとめたレポートやホストファミリーへの自己紹介文の作成を英語で行い、教員の添削をはじめとした指導を通じて、正確かつ洗練された表現を会得する。	肯定的な意見が中学2年生・高校編入1年生では約60～70%で、中学1・3年生では約80%以上であった。中学2・3年生では、オンライン英会話の成果がよく出ていると考える。それ以外の活動でも作品制作や、プレゼンテーションにより、表現力の習得を実感する生徒が多かったと考える。
		国際理解 中学1・2年次は、身近なテーマをもとにグループワークや発表・プレゼンテーション等を通じて、自身の考えを相手に伝えるための技法を習得する。また、中学3年次のアメリカグローバル研修プログラムに向けて、ホストファミリーや現地校での会話、ディスカッションを想定したペアワーク及びグループワークを実践する。	
イマージョン 音楽や体育の授業において、英語でのやり取りを通じ作品を完成させ、発表を行う。			
オンライン英会話 ネイティブスピーカーとの1：1の英会話の中で、自身の言いたいことを伝える機会を多く設ける。			
多様性	国際理解 ディスカッションにおいて、一つの意見を正解とするのではなく、様々な意見を正確に理解し共有できるよう促す。	肯定的な意見が中学2年生で約75%、中学2年・3年生で約85%であった。高校編入1年生では、母集団147人に対してアンケートへの回答数が114と少ない結果であることに加えて、肯定的な意見も約60%と低かった。海外探求プログラムを実施できなかったためであると考えられる。	
	オンライン英会話 毎回異なるネイティブスピーカーが担当し、馴れ合いにならず、常に新しい視点を提供する。		
3	課題発見力 多読やオンライン英会話において、異文化にふれることで、自身のアイデンティティを見つめ始めるきっかけをもち、日々の活動においてプレゼンテーションを授業の形として取り入れることで、他者とコミュニケーションを取りながら、歴史や分野、社会情勢に興味関心をもつ機会を得る。中学3年次、高校1年次に参加可能なエンパワーメントプログラムにおいても国際人としてステップアップするために必要な考え方を得る機会を設ける。	肯定的な意見は中学3年生で73.2%、高校編入1年生で48.2%であり、中学3年生ではその成果をおおむね達成できている。高校編入1年生では、教員から与えられていることに満足してしまっている生徒が多数いると考える。	
	課題解決力 授業中において自身の見つけた課題をグループで共有し、ディスカッションを通して自身が体験したことや他者の意見から自身の考えをまとめ、全体での発表の機会を設ける。	肯定的な意見は中学3年生で82.3%、高校編入1年生で50.9%であり、中学3年生ではその成果をよく達成できている。高校編入1年生では、課題発見力と同様、その解決に実感をとまっていけない生徒が大半いると考える。	

学校関係者評価	
意見・要望など	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・普段から英語を用いるのが当たり前の環境をつくることをイマージョン教育などを通じて行うことで、日々の英語の授業内においても各生徒の積極性が増し、特にリスニング能力の向上が促進されていると感じている。</li> <li>・ネイティブ講師による授業について、全体のレベル上昇を昨年度は検討したが、具体的に到達目標をCEFR（セファール）やバカロレア入試、英検など具体的な数値を設けることにより、授業担当者も到達目標をイメージしやすいのではないだろうか。</li> <li>・イマージョン教育は、日常の中の非日常を得ることが出来るという点でも、生徒の刺激や成長に欠かせないと感じている。</li> <li>・様々な英語の取り組みが、どのような関連性を持っているのかをカリキュラム・マップのよう形で示すことはできないか。また、これらの取り組みすべてが大学入試結果にどのような効果を持っているのかそろそろ検証する時期なのかもしれない。</li> <li>・正課外にネイティブ講師による英検対策講座や海外大学入試対策講座を実施しているが、本校教員に充分なカリキュラムの報告やフィードバックが行われているとは言えない。シラバスの提供をはじめとして、有機的な連携を図っていく必要がある。</li> <li>・中学入試において英語重視型入試を実施しており、一定数の生徒がこの方式により本校に入学しているが、彼らの英語力を維持するための正課プログラムが十分とは言えない。イマージョン教育をはじめとするオールイングリッシュの授業や課外活動なども実施してはいるが、中学1年生の4月より英語の学習を始めた生徒と同じカリキュラムであることが実情である。中学段階において、選択型や能力別授業というのは難しいとは思われるが、彼らへの柔軟な対応が具体的に構築されていくことが求められる。</li> <li>・近年、海外大学進学のためのRoute Hなどにみられるように、グローバルリーダーは東京大学にとどまらず、ハーバード大学といった海外大学への進学を志向するようになってきた。この時世をふまえ、海外大学への進学を希望する生徒に対応できるプログラムの構築が求められるように感じる。</li> </ul>	
その他の取り組み	
<ol style="list-style-type: none"> <li>1：模擬国連 対象：高校1年生・高校2年生</li> <li>2：次世代リーダー養成プログラム 対象：高校1年生・高校2年生</li> <li>3：エンパワーメントプログラム 対象：中学3年生・高校1年生</li> <li>4：アクションイノベーションプログラム 対象：高校1年生・高校2年生</li> </ol>	